

TH Picks for Welfare

【発行日】 2025年1月1日発行

【発行元】 社・本郷 税理士法人 社会福祉法人部

〒160-0022 東京都新宿区新宿4-1-6 JR新宿ミライナタワー28階

TEL：03-6871-9850【受付時間：9時00分～17時30分（土日・祝日・年末年始除く）】

URL：https://www.ht-tax.or.jp

Webサイト



Vol. 14
2025.01

重大事故を防ぐ、 福祉施設のヒヤリハット報告



重大事故につながる恐れのあったヒヤッとした出来事のことをヒヤリハットと呼びます。医療や介護の現場で働く職員は、患者や利用者を預かる立場として事故を起こさないよう細心の注意を払うとともに、事故を未然に防ぐ対策を取らなければなりません。

一般的には、1件の重大事故の背後には29件の軽微な事故があり、そこには300件のヒヤリハットが潜んでいるといわれています（ハインリッヒの法則）。この法則で重要なことは、重大事故の背景には、数多くの危険な要因が隠れているということです。ヒヤリハット等の事象をできるだけ多く把握し分析することで重大事故の防止に繋がります。今回はヒヤリハット報告で重要なポイントを中心にをご紹介します。



ハインリッヒの法則

現場職員と管理者との目線の違い

福祉の現場では事故・ヒヤリハットは毎日のように起きています。高齢者施設であれば転倒、誤薬（薬の服用方法や服用者を間違えること）、離脱（利用者が施設等から外に出て行ってしまうこと）、保育園の場合は遊具によるケガや児童同士のケンカなどです。

現場職員の目線

1件の重大事故を防ぐために、なるべく多くのヒヤリハット事例の収集と分析が必要です。事例が集まれば、ヒヤッとする場面が生じやすい時間帯、場所、利用者などの傾向が見つかるかもしれません。現場の職員はヒヤリハット事例が生じたら、なるべく詳細に報告する傾向があります。中には事故報告と同様に写真や図も添付されたとても丁寧な報告書を作成することもあります。

管理者の目線

一方、管理者は丁寧さ・細かさよりスピードを重視します。いつ・どこで、どんなヒヤリハットがあったのかを職員全員に素早く周知することが最優先だからです。詳細な報告よりも、数値で置き換えられるような簡易な報告を職員からできるだけ多く出してもらうことで、傾向の分析を容易にし、再発防止策を講じることができます。

事故報告書との様式の違い

事故が発生した場合は、行政に事故報告書を作成し報告する必要があります。詳細で正確な記述と場合によっては写真や図などを添えて作成します。一方で、ヒヤリハット報告書の様式は簡易なものが望ましいです。項目があらかじめ印刷されており、○印を付けるだけのものも多くあります。

ヒヤリハットは早く・たくさんが原則です。ヒヤリハットが起きても現場職員の自己判断により報告しない、あるいは事故報告書のように1件ごとに時間をかけてヒヤリハット報告書を作成していると現場管理者の手を煩わせる恐れがあります。ヒヤリハット報告書を作成する目的を見誤らないようにしなければなりません。

重大事故を防ぐ取り組み事例

事例1.A保育園の危険箇所マップ

A保育園では、事故を未然に防ぐ取り組みとして、園内危険箇所マップを活用しています。保育士が園内で危険だと思う箇所の他に、園児自身の経験から危ない思いをした場所にシールを貼ってもらいマップを作成しています。大人と園児の視線の高さが異なることをふまえ、両者の意見を取り入れることで、重大事故を未然に防ぐことに一役買っているそうです。

事例2. 特別養護老人ホームB苑のヒヤリハット報告書

都内の特別養護老人ホームB苑では、職員ステーションにヒヤリハット報告書が立てかけてあります。報告様式は罫線のみが入ったA4用紙に利用者氏名・時間・場所・何があったが1行で書かれているだけです。こちらの介護施設では、出勤した職員が素早く把握してから業務に入れることを最優先しているため、これで十分だと言えます。

重大事故を防ぐために

ヒヤリハットは重大事故を起こさないようにするための頼りになる事象です。詳しさより早さが大事です。いかに素早く全職員に周知するか、福祉施設ごとのさまざまな工夫がなされています。

